A病院のがん患者サロンにおける男性参加者のニーズ

石上真三子

大阪府済生会中津病院　がん診療支援センター　緩和医療室

【はじめに】

日本において昭和56年からがんは死亡原因の第１位となり，今や２人に１人ががんサバイバーである。がんサバイバーはそれぞれが体験しているあらゆる不安，悩み，困難等を安心して吐き出せる場と良き聴き手を必要としていると同時に，同じサバイバーの体験の語りをできるだけ聞きたいと思っており，その社会的サポートのひとつとしてがんサロンがある。当院でも平成28年12月に開設して1年以上が経過した。

最新のがん統計によると男性罹患数の方が多いにも関わらず，がんサロンに関する現状報告や当院のサロン参加者は女性が大半を占めている。男性参加者が少ない理由に関しては未調査である。

【目的】

本研究でＡ病院がん患者サロンの男性ニーズを明らかにし，男性参加者が少ない理由の把握に繋げたい。

【方法】

研究デザイン：質的帰納的研究　研究対象：がん患者サロン「つなぐ」に３回以上参加した男性2名　調査期間：平成29年７月～10月　データ収集方法：がんサロンに通う目的や要望について半構造化面接を行った。　分析方法：逐語録を作成しがんサロンに対するニーズに着目してコード化し，カテゴリーを生成した。

倫理的配慮：所属施設の倫理委員会の承認を得た上で協力者の体調に充分配慮し面接を行った。

【結果】

２個の【カテゴリー】，12個の《サブカテゴリー》に分類された。

男性は損得勘定でものごとを考え《合理的である》ため，サロンは《気楽に参加したい》と考えており《目的のない話を聴くのは苦手》である一方《自分の成し遂げてきた努力を認めてほしい》《性別特有の考えや問題を理解してほしい》《同じような苦難を乗り越えた人と話したい》と思っていた。しかし《気を遣いたくない》ので《初対面では簡単に自己開示しない》傾向にあり【男性の考えを認識してほしい】ニーズ（表１）が明らかになった。

また，《がんに関する最新の情報を得たい》《他社貢献することで人の役に立ちたい》とサロン参加者には明確な目的があり，【自分の目的を達成したい】ニーズ（表２）があった。

サロンに参加する副次的結果として《生への活力》《自己成長への気付き》があった。

【考察】

男性には【自分の目的を達成したい】ニーズがあり，

表１

カテゴリー	サブカテゴリー	語り
男性の考え方を認識してほしい	合理的である	男は仕事や楽しみを優先する。損得勘定になる。
	気楽に参加したい	無料。駅から近い。出入り自由。プログラムがない。
	目的のない話を聴くのは苦手	雑談形式は話しっぱなしでまとまりがない。男は話を聴くのが苦手。
	性別特有の考えや問題を理解してほしい	女性がかたまってしまうと、子宮がんや乳がんの話になるので男が入っていきにくい。
	自分の成し遂げてきた努力を認めてほしい	男の人は武勇伝とかそういうのを語らせることでストレス発散になる。話をするのは楽しい。家ではそういうことは言えない。
	同じような苦難を乗り越えた人と話したい	自分と同じ病気の人と話したい。がんじゃない人と喋っても共感するところがない。
	気を遣いたくない	面倒くさがり。とくに気を遣うのが。
	初対面では簡単に自己開示しない	男はちょっととっつきにくいと思う。

表２

カテゴリー	サブカテゴリー	語り
自分の目的を達成したい	がんに関する最新の情報を得たい	（治療や闘病に関して）生の情報というか直近の情報を共有できる。
	他者貢献することで人の役に立ちたい	仕事をしていたら社会貢献度が高いなって思える。ここに来ると自分が必要とされていると感じる。元気を与えていきたい思いが参加する度に強くなる。
	生への活力	やっと夢が叶った。僕の生きた証にも喜びにもなるし、これをやっているからこそ、生き延びられているって思います。
	自己成長への気付きがある	家族とか人の気持ちなんか考えなかった。病気になったからこそ言える。

受付け：平成31年３月18日

目的達成に繋がる自己利益を得られるものをサロンに望んでいた。しかし，そのような環境が充分に整っていないため，まずは【男性の考えを認識してほしい】と考えていることが明らかになった。

黒川[1]は，戸籍上の性別と脳の性別は必ずしも一致しないが性差があり，男性脳はゴール志向型であると述べている。すなわち，男性はものごとにゴールを定め，それに向けて考え行動する，合理的な思考をもっているという特徴がある。ゆえに目的が明確にある話は関心を持って聴けるが，そうでない話を聴くことは苦手なのだと考える。

しかしその一方，これまでの苦労や成し遂げてきた努力を認めてもらいたい，性別特有の考えや問題を理解してほしいため話したいと思っているにも関わらず，男性は家族にさえ弱みをみせたくないと本心を話しにくいことが明らかになっている。

朝倉は「がんサバイバーは，それぞれが体験しているあらゆる不安，悩み，困難等の，とりわけネガティブな感情を，安心して吐き出せる場と良き聴き手を必要としている」[2]と述べている。男性は話を聴いてくれるなら誰でも良いのではなく，会話の目的を共有できるがん体験者，且つ同じような苦難を乗り越えた人を対話の相手として求めていた。これらのことから，目的のない話を聴くのは苦手だが，同じような苦難を乗り越えた人とは話したいという考えをもっていることが示唆された。

男性もサロンに参加しようとは思うものの，初対面の相手とは会話の目的が明確ではないのでお互いの目的が共有できるまでは自己開示しない傾向にあり，とっつきにくい印象を与えてしまいがちである。とくに女性は対話のプロセスから共感を得て，自己開示し合いながら関係性を深めていくため，女性との対話において目的のない話を聴くことは欠かせないと考える。サロン参加者は初対面且つ女性が多いので，女性同士が集まると男性が理解できない性別特有の話や好まない雑談のような話になりがちである。

男性はコミュニケーション方法の違いをストレスに感じてしまい，参加意欲が減退すると考える。これはサロンから足が遠のく原因となっており，男性参加者が少ない現状に繋がると考える。初対面の男性と女性の対話は，共通の目的を最初に定め，プロセスを経てこそ成立すると考える。

また，男性はサロン参加目的が明確にあり，自己利益がないと参加意欲が低下することが示唆された。男性特有の考えを認識し，自己利益を得られる環境が整っていると参加意欲に繋がり，男性も女性同様に自らの感情や悩みをサロンで表出することができるのではないかと考える。

これらの男性ニーズが明らかになると，当サロンはニーズに充分応えられていないことがわかる。“同じような思いをもつものが気楽に集え，ホッとできるカフェのようなあたたかい場所”を目指して取り組んでいるが，なぜそのような形態にしたのか。それは女性患者から「同じような状況の人と出逢える場がほしい」と相談を受けたのがそもそもの始まりである。また，相談者の声を形にしようと企画したのも女性であり，男性の意見も取り入れてはいるものの，総合的には女性の視点で考案されたものが形になっているため男性が参加しにくいのも当然だと考える。男女ともに満足して参加継続できるサロンにするには，開催者側がそれぞれの特性を理解し，多様なバリエーションをもつことが必要である。具体的には，場や状況を迅速，且つ正確に読み取り判断する力と，臨機応変に対応し，介在できる力が必要だと考える。

【結論】

脳の性差の面から見たひとつの結果として，男性，女性，特有の考え方があり，男女が同じ体験をしたとしても，ものの見方や考えが異なっていることが理解できた。明らかになった男性参加者のニーズを当サロンにも取り入れ，発展に繋げたいと考える。

【引用参考文献】

1．黒川伊保子（2016），キレる女　懲りない男－男と女の脳科学，筑摩書房.

2．朝倉隆司（2014），がんサロンの意義・方向性，がん相談員のためのがんサロンの設立と運営のヒント集，2014年７月発行第１版，ｐ.8 - 9，独立行政法人　国立がん研究センター　がん対策情報センター

3．上田育子ほか（2013），当院がん患者サロン「ひだまり」の評価と課題－サロンの現状と参加者へのアンケート調査から，がんと化学療法，40(9)，ｐ.1195 - 1200.

4．ピーズ，アラン・ピーズ，バーバラ（2002），話を聞かない男，地図が読めない女―男脳・女脳が「謎」を解く（藤井留美訳），主婦の友社.

5．国立がんセンター（2017），がん情報サービス　がん日本の最新がん統計まとめ
〈https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html〉
（参照2017 - 12 - 29）